慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	記憶の社会学・ 序説
Sub Title	Introduction : sociology of memory
Author	浜, 日出夫(Hama, Hideo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2007
Jtitle	哲學 No.117 (2007. 3) ,p.1- 11
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this paper is to give an outline of the sociology of memory in comparison with the psychological study of memory. First, sociology treats memory as a collective phenomenon, while psychology treats it as an individual phenomenon. Second, sociologists make a study of memory in everyday life situations, while psychologists study it in a laboratory. Third, while psychologists have a correct answer with which a subject's remembrance is compared, sociologists do not have it. Fourth, sociology thinks of the past as being retained in space and materials, while psychology seeks it in the brain. Fifth, while psychology thinks of remembrance as reproducing correctly or wrongly thee past retained in a brain, sociology considers it as reconstructing the past on the present's basis. Finally, while the psychological usage of memory allows applying it only to the memory of people who experienced a certain incident themselves, sociology extends it also to the memory of people who did not experience the incident at all.
Notes	特集記憶の社会学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000117-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

記憶の社会学・序説

浜　　日出夫*

Introduction: Sociology of Memory

Hideo Hama

The purpose of this paper is to give an outline of the sociology of memory in comparison with the psychological study of memory.

First, sociology treats memory as a collective phenomenon, while psychology treats it as an individual phenomenon.

Second, sociologists make a study of memory in everyday life situations, while psychologists study it in a laboratory.

Third, while psychologists have a correct answer with which a subject's remembrance is compared, sociologists do not have it.

Fourth, sociology thinks of the past as being retained in space and materials, while psychology seeks it in the brain.

Fifth, while psychology thinks of remembrance as reproducing correctly or wrongly the past retained in a brain, sociology considers it as reconstructing the past on the present's basis.

Finally, while the psychological usage of memory allows applying it only to the memory of people who experienced a certain incident themselves, sociology extends it also to the memory of people who did not experience the incident at all.

* 慶應義塾大学文学部

本稿では，「特集：記憶の社会学」に先立ち，M・アルヴァックスの集合的記憶論をてがかりとして，心理学における記憶研究と比較しながら，社会学的な記憶研究の特徴を整理しておくことにしよう．

まずひとつの記憶実験を取り上げてみよう（筆者が学生のころに被験者となったことのある実験である）．実験室に入り，椅子にすわる．前の机のうえにダンボール箱大の箱が置かれ，のぞきからくりのようにのぞき穴がふたつ開けられている．それをのぞくと，「カハ」「ネト」のような意味のないカタカナ２文字の組み合わせが一定の間隔で次々に出てくる．見終わったあと，一定の時間をおいて，覚えていることばを実験者に告げる．いまから振り返ると，自由再生法を用いた短期記憶についての実験であったことがわかる．この実験によって，呈示されたことばの系列のなかでことばが占めている位置（系列位置）によって再生率がどのように異なるかを示す系列位置曲線が得られる．リストのはじめのほうに出てきたことばと終わりのほうに出てきたことばの再生率が高いことが知られている（無藤・森・遠藤・玉瀬 2004: 84）．

きわめて初歩的な実験であり，この実験で心理学の記憶研究を代表させることはフェアではないが，単純な実験であるためにかえって心理学において前提とされている記憶概念を見えやすい形で示しているという利点がある．

まずここでは記憶が個人的な現象とみなされていることがわかる．

心理学では，一般に，記憶は記銘・保持・想起の３段階からなるものとして考えられている（無藤・森・遠藤・玉瀬 2004: 80–82）．すなわち，私たちがパソコンにデータを入力し，フロッピーディスクなどの記憶媒体に保存し，それをふたたび取り出すのと同様，記憶は，情報を覚え（記銘），脳に貯え（保持），それを思い出す（想起），一連の情報処理過程としてとらえられている．そして，この実験では，これら３つの段階はすべて他者から切り離された孤独な個人の営みとしてなされる．まず記銘は

被験者がひとりのぞき窓をのぞきこむことによってなされ，したがって保持がなされるのも被験者の脳の中であり，それを被験者はひとり頭をふりしぼって想起しなければならない．この実験で測定されているのは，被験者がひとりで記銘し，保持し，想起した個人的な記憶である．

しかし，このような記憶のあり方は，実験室を一歩出れば，むしろ例外的である．もちろん，試験のときのように，ひとりで暗記した答えを，ひとり頭をふりしぼって思い出さなければならないような状況は，実験室の外でもあるだろう．だが，日常生活においては，私たちは誰かとともに出来事を経験することがふつうであるし，また何かを思い出す際にも，私たちは素手でひとり頭をふりしぼって思い出すのではなく，写真やメモのような手がかりに頼り，あるいはもっとてっとり早く誰かに「あれ，どうだったっけ」と尋ねるだろう．すなわち，日常生活のなかでは，私たちは他者とともに出来事を記銘し，他者とともにアクセスできる公共的な手がかりの中にそれを保持し，そしてそれらの手がかりを用いながら他者とともにふたたびそれを想起するのである．このような日常生活における記憶のあり方を，アルヴァックスは「集合的記憶」と呼んだ．社会学が関心をもつのは，実験室の中での孤独な個人の営みとしての記憶ではなく，このような日常生活における集合的な営みとしての記憶である．

以下では，アルヴァックスの集合的記憶論の要点を整理しながら，社会学における記憶研究の基本的な特徴をみていこう．

まず，アルヴァックスの集合的記憶論は，いま述べたとおり，記憶という現象を，個人的現象としてではなく，他者とともに記銘し，他者とともに想起するという，集合的な現象としてとらえるものである．アルヴァックスによれば，「人が想い出すのは，自分を一つないし多くの集団の観点に身を置き，そして一つないし多くの集合的思考の流れの中に自分を置き直してみるという条件においてである」(Halbwachs 1950＝1989:19)．これはすなわち，人は集団の一員として過去を想起するということである．

だが，集合的記憶は，単純に「集合的」であることによって，個人的記憶と異なるだけではない．集合的記憶の概念のうちには，さらに「記憶」という現象のとらえかたそのものの根本的な変更が含まれている．

個人的記憶という観念は，過去の出来事についての記憶が，脳の内部か，あるいは無意識の底か，いずれにせよ自分だけしか近づくことのできない「心」のなかのどこかに保存されていて，自分だけがそこから記憶を取り出して，過去の出来事を再生することができるという，記憶についてのある特定の理解のしかたと結びついている．記憶が「心」の内部のどこかに保存されていて，自分だけがそれを再生できるということが，記憶が個人的現象であることの根拠とされているのである．

アルヴァックスは，記憶がどこかに保存され，それが再生されるというこの考え方を批判する．

> 脳の中のどこかか，心の片隅のどこかに，私だけが近づくことのできる記憶の保存場所を探そうとしても無駄である．というのも，記憶は外部から呼び起こされるのだからである．私がその一部となっているさまざまな集団が，私がそれらの集団に注意を向け，少なくともしばらくのあいだ，その集団の思考方法を採用するという条件のもとで，つねに記憶を再構成するための手段を私に与えるのである．(Halbwachs 1925＝1992: 38)

集団の観点に立って想起するということは，単に集団の一員として過去を想起するというだけではない．それは同時に，そのときどきに集団が用意している「記憶の枠組」を用いて過去を想起するということでもある．そしてこれは，想起が行なわれる現在においてそのつど過去が再構成されるということを意味している．コーザーはアルヴァックスのこのような考え方を「現在主義」(Coser 1992: 25) と呼んでいる．アルヴァックスによ

れば，記憶とは，もはや過去を「保存」し「再生」することではなく，現在の視点から過去を「再構成」することなのである．

> 過去は実際にはそれ自体として再生するのではない．あらゆることがらが示唆しているように思えるのは，過去は保存されるのではなく，現在の基盤のうえで再構成される，ということである．(Halbwachs 1925＝1992: 39–40)

心理学の記憶研究は記銘・保持・想起の全過程を対象とするのに対して，アルヴァックスの集合的記憶の概念は，この3つの段階のうち，もっぱら想起に焦点を当てたものである．この意味では，アルヴァックスの集合的記憶の概念は「集合的想起」と呼ぶほうがより正確である．

このことは，心理学が実験室の中で記憶を研究し，社会学が日常生活の中での記憶を研究するという，両者が記憶を研究するさいの条件のちがいともかかわっている．心理学の記憶研究では，何が記銘されるかが実験室の中で厳格にコントロールされている．さきほどの実験では，実験者は，当然，被験者に呈示することばのリストを持っている．すなわち，心理学者は何が記銘されたかについて「正解」をあらかじめ持っており，被験者が想起したことばはこの「正解」と照合されて，「再生率」が計算される．だが，実験室の外では，このように記銘の条件を厳格にコントロールすることは不可能であり，想起の内容を照合できる「正解」を持っている人間はいない．むしろ私たちは想起内容をたがいに突き合わせながら，他者とともにそのつど手探りで「正解」を作り出しているのである．そして，心理学者といえども，実験室を一歩出れば，「正解のない世界」(高木 2006: 85) で想起の研究に取り組まなければならない点では変わりはない (佐々木編 1996)．

過去が「心」のなかに保存されているのではないとすれば，私たちはど

のようにして過去を想起することができるのだろうか．アルヴァックスによれば，過去は物質や空間のなかに保存されているのである．

> もし過去が実際にわれわれを取り囲む物的環境によって保持されていなければ，過去を取り戻せるということは理解されないだろう．……しかじかの部類の想い出が再生されるために，われわれの思考が凝視しなければならないのは，この空間なのである．(Halbwachs 1950＝1989: 182)

すでに述べたように，日常生活でなにかを思い出そうとするとき，私たちはメモや手帳，日記や写真などに頼る．だが，それだけではない．たとえば，なにかを探しているさいちゅうに，なにを探していたのか忘れてしまうことがあるが，そういうとき私たちは探し物をはじめた場所に戻ってみる．そうするとたいていなにを探していたのかを思い出すのである．また子供のころ過ごした場所を訪れると，そのころのことが一度によみがえってくるということもよく体験することである．これらの経験は想起が空間と密接に結びついていることをよく示している．

また音楽の一節を耳にしたり，なにか食べ物や飲み物を口にしたり，なにかのにおいをかいだときに，突然むかしのことを思い出すことがある．これらは想起と物質の密接なかかわりを示す例である．プルーストの『失われた時を求めて』のなかで，主人公が紅茶にひたしたマドレーヌのかけらを口に含んだとたんに，子供のころ，叔母がマドレーヌをひたした茶をすすめてくれたことを思い出し，それとともに記憶の大伽藍が出現する場面は，想起と物質のかかわりを雄弁に物語っている．

> 私が，ぼだい樹花を煎じたものにひたして叔母が出してくれたマドレーヌのかけらの味覚だと気がついたとたんに，……たちまち，表通

に面していてそこに叔母の部屋があった灰色の古い家が，芝居の舞台装置のようにあらわれて，それの背後に，庭に面して，私の両親のために建てられていた，小さな別棟につながった，……そしてこの母屋とともに，朝から晩にいたるあらゆる天候のもとにおける町が，昼食までに私がよく送りだされた広場が，私がお使に行った通が，天気がいいときにみんなで足をのばした道筋が，あらわれた．そしてあたかも，水を満たした陶器の鉢に小さな紙きれをひたして日本人がたのしむあそびで，それまで何かはっきりわからなかったその紙きれが，水につけられたとたんに，のび，まるくなり，色づき，わかれ，しっかりした，まぎれもない，花となり，家となり，人となるように，おなじくいま，私たちの庭のすべての花，そしてスワン氏の庭園のすべての花，そして教会，そしてヴィヴォーヌ川の睡蓮，そして村の善良な人たちと彼らのささやかな住まい，そして教会，そして全コンブレーとその近郷，形態をそなえ堅牢性をもつそうしたすべてが，町も庭もともに，私の一杯の紅茶から出てきたのである．(Proust [1913] 1954＝1992: 79)

プルーストはこのような記憶を「無意志的記憶」と呼び，「理知の記憶」「意志的記憶」から区別している．プルーストによれば，「過去を喚起しようとつとめるのは空しい努力であり，われわれの理知のあらゆる努力はむだである．過去は理知の領域のそと，その力のおよばないところで，何か思いがけない物質のなかに（そんな物質があたえてくれるであろう感覚のなかに）かくされている」(Proust [1913] 1954＝1992: 74) のである．

このように過去が物質や空間のなかに保持されているということが，社会学が記憶を研究するさいの方法論とも関連してくる．社会学は，記憶を研究するとき，心理学のように被験者の頭の中をのぞきこもうとするのではない．社会学は，過去が刻まれた空間や物質の配置，またそれらをめ

ぐって営まれる人びとの活動の編成を観察することを通して，記憶を研究するのである．

フランスの歴史家P・ノラは，「集合的記憶が根付いている重要な『場』」(Nora 1996＝2002: 1) を「記憶の場」と呼んでいる．「『記憶の場』とは，物質的なものであれ，非物質的なものであれ，きわめて重要な含意を帯びた実在である．それは人間の意志もしくは時間の作用によって，なんらかの社会的共同体……のメモリアルな遺産を象徴する要素となったものである」(Nora 1996＝2002: 18–9).「記憶の場」には，史跡や歴史的建造物，博物館や記念碑，銅像や絵画などの物質的な場のほか，戦友会や同窓会，歴史書や暦などの機能的な場，葬儀や記念行事，黙祷や巡礼などの象徴的な場がある (Nora 1984＝2002: 48). また，これに漫画や写真，テレビや映画などのメディアも重要な記憶の場として付け加えることができる（Morris-Suzuki 2005＝2004; 伊藤 2005; 大石 2005）．この言葉を用いて言えば，社会学はこれらの「記憶の場」とそれにかかわる人びとの活動を観察することによって，記憶を研究するのである．

アルヴァックスもまた，エルサレムやパレスチナに残されているキリスト教の聖地とキリスト教徒の集合的記憶の関係を具体的に考察している (Halbwachs 1941＝1992). キリスト教は，キリスト教がローマ帝国の国教となって以来，福音書に書かれているさまざまな超自然的な出来事を空間のなかに書きこんでいった．そして，今日でも，キリスト教徒は，ナザレの受胎告知教会，ベツレヘムの聖誕教会，最後の晩餐の部屋，イエスが逮捕されたゲッセマネの園，イエスが十字架を担いで歩いたヴィア・ドロローサ（悲しみの道），イエスが十字架に架けられたゴルゴダの丘に建つ聖墳墓教会，オリーブ山の昇天教会などの聖地を巡ることによって，イエスの生涯をたどることができる．アルヴァックスによれば，「福音書の全歴史は地面の上に書かれているのである」(Halbwachs 1950＝1989: 205).

最後に，この記憶の物質性・空間性とさきほどの現在主義から導きだされるひとつの重要な帰結について述べておこう．それは，空間や物質のなかに残された痕跡を通して，現在の視点から，過去が再構成されるのであるとすれば，過去を想起する主体は当事者には限られないということである．記銘・保持・想起というモデルで記憶を考えるかぎり，ある出来事について想起することができるのは，その出来事を記銘した人，すなわちその出来事を経験した当事者だけであるということになる．だが，記憶とは集団の「記憶の枠組」を用いてなされる想起であり，さらに想起が誰でも近づくことのできる物質や空間を媒介として生じるのだとすれば，想起の主体は当事者には限定されないことになる．アルヴァックスの聖地研究が示しているとおり，集合的記憶の射程は，もはや誰ひとりそれを経験した者がいないはずのイエスの受難にまでさかのぼるのである．このように集合的記憶の概念は，個人的記憶の射程を越えて，歴史の領域へと越境していく．

たとえば，「パール・ハーバー」を思い出すのは，1941年12月7日（現地時間）に実際に真珠湾攻撃に遭遇した人たちや，当時ラジオや新聞でそれを間接的に知った人たちだけではない．毎年12月7日（ナショナル・パール・ハーバー記念日）にアメリカ各地で開かれる記念式典に参加したり，それを報道するテレビ番組を見たり，アリゾナ号記念館を訪れたり，映画『パール・ハーバー』を見たりする戦後生まれのアメリカ人たちもまたやはり「パール・ハーバー」を思い出すのである（細谷・入江・大芝編2004）．また「ヒロシマ」を思い出すのも，1945年8月6日に実際に広島で被爆した人たちや，ラジオや新聞で当時間接的に「新型爆弾」について知った人たちだけではない．毎年8月6日に開催される平和記念式典に参加したり，それに関連する新聞報道やテレビ番組を見たり，広島を訪れて原爆ドームを見上げる戦後生まれの日本人たちもまた「ヒロシマ」を想起するのである（浜2005）．ナショナリズムという現象はこの

ような非当事者による戦争の想起と密接にかかわっている．このように記憶概念を非当事者による想起も含めて用いることは，社会学における記憶概念と心理学における記憶概念のもっとも大きな違いである．

最後に，社会学における記憶研究と心理学における記憶研究の違いをもう一度まとめておこう．ただし，これらの違いはあくまで理念型として理解されるべきものである．

第一に，心理学が記憶を，ひとり記銘し，ひとり想起する個人的現象としてとらえているのに対して，社会学は記憶を，集団で記銘し，集団で想起する集合的現象としてとらえている．

第二に，心理学者がおもに実験室の中で記憶を研究するのに対して，社会学者は日常生活の中で研究する．

第三に，心理学者は被験者によって想起された項目を照合することのできる「正解」をあらかじめ持っているのに対して，社会学者はそのような「正解」を持たない．

第四に，心理学が過去は脳の中に保持されていると考えているのに対して，社会学は空間や物質の中に保持されていると考えている．

第五に，心理学が想起を，脳の中に保持された過去を正しくあるいは誤って再生することであると考えているのに対して，社会学は想起を，空間や物質を手がかりとして現在の視点から過去を再構成することとしてとらえている．

第六に，心理学の記憶概念はある出来事を記銘した当事者の記憶に限定されるのに対して，社会学の記憶概念は当事者の記憶だけではなく，非当事者の記憶も含んでいる．

引用文献

Coser, L. A., 1992, "Introduction: Maurice Halbwachs 1877-1945," in: Halbwachs 1992.

Halbwachs, M., 1925, Les Cadres sociaux de la memoire, Alcan. (= 1992, Coser, L. A., tr., The Social Frameworks of Memory, in: Halbwachs 1992.)

Halbwachs, M., 1941, La Topographie legendaire des Evangiles en Terre Sainte, P.U.F. (=1992 Coser, L. A., tr., The Legendary Topography of the Gospels in the Holy Land, in: Halbwachs 1992.)

Halbwachs, M., 1950, La Memoire collective, P.U.F. (=1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社.)

Halbwachs, M., 1992, On Collective Memory, Edited, Translated, and with an Introduction by L. A. Coser, University of Chicago Press.

浜日出夫, 2005,「ヒロシマからヒロシマたちへ」有末賢・関根政美編『戦後日本の社会と市民意識』慶應義塾大学出版会.

細谷千博・入江昭・大芝亮編, 2004,『記憶としてのパールハーバー』ミネルヴァ書房.

伊藤守, 2005,『記憶・暴力・システム』法政大学出版局.

Morris-Suzuki, T., 2005, The Past Within Us, Verso Books. (=2004, 田代靖子訳『過去は死なない』岩波書店.)

無藤　隆・森　敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治, 2004,『心理学』有斐閣.

Nora, P., 1984, "Entre Memoire et Histoire," Les Lieux de Memoire, Editions Gallimard. (=2002,「記憶と歴史のはざまに」谷川稔監訳『記憶の場 1』岩波書店.)

Nora, P., 1996, "From Lieux de memoire to Realms of Memory," Realms of Memory, vol. 1, Columbia University Press. (=2002,「『記憶の場』から『記憶の領域』へ」谷川　稔監訳『記憶の場 1』岩波書店.)

大石裕, 2005,『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房.

Proust, M., [1913] 1954, A la recherche du temps perdu I, Editions Gallimard. (=1992, 井上究一郎訳『失われた時を求めて 1』ちくま文庫.)

佐々木正人編, 1996,『想起のフィールド』新曜社.

高木光太郎, 2006,『証言の心理学』中公新書.